のであつて、その間、別段新しい考証も議論も鮮いやうでもあり、尙ほ又た前記の如く多少の遺憾の點をも伴ふて居るにも拘はらず、大體に於て英語にては同樣の近業の內、稀に覩る纏りの附いた小著作である。隨て一は古代印度に興味を有する者のために、他はヘレニズム研究家のために頗る面白く且つ有益なる好著たるを失はない、因て古代に於ける東西交通に關する近著として冒頭既記のショッフ譯註『エリッラ海案內』と共に、併せて之を江湖に紹介する。

（完）

『鎌倉武士と禪』　鷲尾順敬著

大正五年十一月發行（三五版二七九頁）

文學博士　三浦周行

本問題を取扱つたものは是迄にも少いとはせぬが、本書は日本佛敎史家たる著者の手に成つたものであるだけ、讀者の注意を惹くこと多かるべきは言ふ迄もあるまい。余輩は鎌倉時代の禪宗を廣い佛敎史の見地から徹底的に說明した良書として本書を江湖に推奬するに躊躇せぬ。

さり乍ら最初の一二章を讀んで居る間こそ「我國の佛敎の文化史的研究に依り國民の思想傾向の一面を觀察せんとし、本書の結構を試みた」との著者の用意に首肯づかれるけれども、それから後は主として鎌倉時代の重もなる禪僧と其檀越であつた一二の北條執權との傳記的記述に傾いて居る。尤其間には禪宗の成立傳來乃至其制度等の說明も交へられて居るとはいへ、著者が最初に高唱した新時代の新氣運に當つて國民の精神的衝動としての新興佛敎の說明としては聊か物足らぬ感がないではない。余輩は本書に結論がないからと言つて別に慊らず思ふものでもない、南宗禪宗の國家的意義が此時代の武士に刺擊を與へたことが本書

に詳悉されて居らぬといふについても亦同樣である。只本書の主題たる鎌倉武士と禪とについて他に一層適切なる記述を要しはせぬかといふことについて著者の再考を煩したい。

次に余輩が本書を通讀した際に注意に上つた一二の點について著者の示敎を請はう。現世利益の祈念が飛鳥朝時代からの佛敎に起つて居ること、此祈念の反面には又來世得脫の祈念も起つて居ることは余輩も均しく認めるところである。而かも其初最も强く我朝野の信仰を支配しつゝあつたものは無論前者であつて、それは我々國民の祖先が政治上、社交上の原因から殆ど原始人其儘の現世的、實利的信念を持つて一種の國民性を形作りつゝあつたからであると信ずる。余輩は本書に於て初渡佛敎と其渡來以前の我國民固有の信仰とを結附けて考へられなかつたことを深く遺憾とする。若しも此點に注意されたならば飛鳥朝以來の佛敎の現世利益の祈念の我國民に共鳴されたことはもとより、其闕陷を補はんが爲めに、淨土敎の來世得脫の祈念が、やがて人心を風靡するに至つたことについても、淨土敎の由來の久しいことや其勢力の熾盛であつたことに關する著者の說明と相待つて徹底的の理解が得られたであらう。

淨土敎と武士とに就ての著者の觀察は又稍精透を闕いて居るやに思はれる。著者に據ると、武士は戰場に臨んで殺戮を行ふものである爲めに後には大概みづから罪業を懺悔して來世得脫の祈念をなすに至つたので、平安朝時代の後期から鎌倉時代の初期にかけての武士の信仰は殆ど全く淨土敎であつたが、賴朝は淨土敎に傾いて居た形跡がなく、幕府は寧ろ念佛修行の弊風を恐れて修行者を懲らした事實がある。義時、泰時は末後に至つて淨土往生を願求したが、それは三浦氏一族が法華堂で自害の際に淨土敎の行者西阿の勸化に依つて

稱名したのと同意義で、寧ろ彼等末後の悲慘を暗示して居るといふのである。

若しも鎌倉時代の武士が淨土敎の敎義を信條として居たとを認めるならば、假りに頼朝や義時泰時等の平生淨土敎に傾いて居なかつたとしても、それは例外であつて、淨土敎の傳播を以て我國民的精神の衝動とする著者の見地からは格別重きを爲さぬことであらう。さり乍ら來世得脫の祈念は當時既に深く國民の腦裡に刻附けられて居つた。朝廷の念佛禁斷の宣旨が其効のなかつた如く、幕府の念佛僧の袈裟を剝いだことも、もとより一時的の政策に過ぎぬ。宗敎上の問題は政治問題など程、政策に重きを置くの要はない。加之末期に於て淨土往生の願求は當時貴賤男女に共通の信仰となつて居たことで、それでも安心往生が出來れば他の參禪工夫等より得たものと同樣、決して悲慘の最後とはいはれまい。縱ひ平素歸依の形跡は見ねずとも、此臨終期の稱名を以て彼等の潛在的信念を窺ふことが出來る。實際に廣い意味の淨土敎は宗派の如何を問はず、わけても平安朝の後期以後は國民的信仰となつて居たといへるのである。

著者は時頼から北條氏一族の佛敎の信仰が大に改つて新面目を發揮するに至つたといつて、同人や時宗の參禪を力說せられて居る。余輩も其禪僧の語錄類に見ねたものに對して多少の割引をしても、大體にこれを認めるものではあるが、是等一二の人々の個人的修養の跡を見て、直に鎌倉武士に通じた思想傾向を窺ふに足りるであらうか。北條氏一族は鎌倉武士の代表者であるといふ著者の觀察の前提からいへば、北條氏の信仰は彼等の精神生活の全面であるとの歸結も得られやうが、然らば鎌倉武士の信仰は時頼以後禪宗に傾いたといへるけれども、同時に時頼以前は淨土敎に歸依して居なかつたことになつて、鎌倉の初期迄の武士

の信仰が淨土教に依つたとの著者の前言に裏切することにならねばならぬ。單に北條氏と禪といふ問題であるならば斯樣な研究態度で遺憾はあるまいが、鎌倉武士に通じた信仰狀態について文化史的研究を目的とする著者としては彼等の間にも特殊な地位を占めた一二の執權を捕へて其信仰を見たゞけでは能事終れりとされまい。北條氏が鎌倉武士の代表であるや否やといふことを考量する前に、先づ是等の一二執權が北條氏を代表すべきものなりや否やといふことが疑問であらねばならぬ。況んや彼等の精神的修養と政治的生活とは必ずしも一致しなかつたのである。時賴の出家にしても、著者はそれが專ら佛教的生活を營まうとしたもので、普通の習慣からする出家でなかつたといはれるけれども、出家後の時賴が依然として幕府の樞機を握り俗務に携つて居た事實はこれを見逃すことは出來まい。余輩は執權の出家や禪僧的最後よりも却て鎌倉諸禪林の一體に萎靡沈滯したといはれる此時代の末期に、泰然として主家の難に殉した幾多鎌倉武士の間により多く參禪工夫の感化を認めるものである。總じて形式よりも實質を重んじた此時代の問題を取扱ふものに取つては此邊の着眼が一層緊要ではあるまいか。余輩は畏敬する著者に向つて問訊したい。

加藤繁氏著『支那古代田制の研究』を讀む

文學士　岡崎文夫

加藤氏は曾て史學雜誌上で、支那古代の土地制度の研究を公にせられた。此問題は支那學者の中でも頗る異論の多い者であるから、氏が進んで此の難關に研究の歩を進められやうとする努力は、余輩窃かに感じたのである。今回氏の研究が京都法學